
ホテルのニュースレター

日本ホテルの会 2020/1 第84号

私の初夢

ー 三浦半島の魅力ある里山を取り戻したい ー

日本ホテルの会 会長 本多 和彦

新年明けましておめでとうございます。令和2年の新春を健やかに過ごしのこととお慶び申し上げます。本年も日本ホテルの会にご支援賜りますよう、よろしくお願いいたします。

さて、私は2年ほど前まで神奈川県横須賀市で環境に関わる仕事をしていました。かつて、環境といえば公害対策であり、次いで開発から自然環境を守ることが重視されるようになったと思います。現在でもこれらは引き続き重要な課題ですが、これらを包括しつつ、今私たちが共通して取り組まなければならないことは、地球温暖化対策と生物多様性保全にあると考えています。廃棄物も、生活環境の保全も、自然保護も、あらゆる環境課題が、この二つの地球規模の環境課題に結びついているというのは言い過ぎでしょうか。また視点を変えると、この二つの課題は、全ての人がそれぞれの立場で何らかの努力をすることができる、一人ひとりが何かをしなければならないものであると思います。こうした視点で、行政としての「環境」に取り組んでまいりました。今回は、この中から「里山の再生」について、人の営みという観点で思うところを書かせていただきたいと思います。

横須賀市は、200m 程度の丘陵とそこに形成される谷戸という地形で成り立っています。谷戸の上流部に堰(せき)と呼ばれるため池があり、その下流には谷戸田が形成され、さらにその下流で河口に近い地域には田んぼが広がっていました。私が現在勤務している久里浜という地域は、江戸時代に「内川新田」として2級河川平作川河口に開発された水田地帯だったとのことです。こうした河口に広がる水田、谷戸を形成する丘陵に古くから人が暮らしてきました。そして、その人の暮らしとともに里山環境が育まれてきました。三浦半島には、いくつかの貝塚があり、縄文時代にはすでに人が住んでいたようです。そうした人の営みは数千年にわたって続き、三浦半島の原風景が形作られ、多くの里山の生物を育んできました。暮らしの中で人々は、少しでも豊かにしようと、里山や田畑から恩恵を得てきました。田畑の耕作や里山林の適度な伐採などが行われ、

人と関わる形で、今でいう「持続可能(サステナブル)」な関係が築かれたのだと思います。三浦半島の薪炭は他所へ売られていたという話もあり、行き過ぎた経済活動もあったのかもしれませんが、そうしたものも含め、つい60年ほど前まで、随所にホタルが舞い飛ぶ環境が残されていました。この環境を大きく変えたのが、人の営みの変化であり、土地や山の持つ経済的な役割、価値の変化であったと思います。ここには、わが国の経済発展と大都市化、技術革新と生活様式の変化が関わっています。先日、テレビの番組で「マツタケはなぜ高いのか？」というクイズがありました。答えは、「プロパンガスが普及したから」というものでした。一見無関係なマツタケとプロパンガス、この背景にあるのは、かつて松葉や松ぼっくり、枯れ枝などは、炊事などの燃料として大切なもので、人々は山に入り、集められるだけの落ち葉や枯れ枝を集めていたということです。それがプロパンガスの普及により、薪や焚き付けは不要となり、松林が放置されるようになりました。これによって松林の土壌が肥沃となり、マツタケは他のキノコとの競争に敗れて数を減らし、結果として高価なものになってしまったという説明でした。ここには、誰もがプロパンガスを使えるようになったという技術の進歩、プロパンガスを買うことができるという収入の向上、そして便利なものを活用する生活の変化があります。もちろん、これらは決して間違ったことではありません。豊かさそこに生まれる幸せを希求する、常に進歩を旨としてきた私たちの成果でもあるからです。とはいえ、こうした里山の価値の変化は、この数十年で加速度的に進みました。減反政策や海外からの農産物輸入などに影響され、農作物を作るより、開発して宅地にした方が利益が大きいとか、薪や炭より使いやすい化石燃料が普及したとか、木材も輸入材が経済的なので山に人が入らなくなったといったことが急速に進み、里山は失われ、あるいは荒れるに任せる結果となったのです。

今でも三浦半島の谷戸の奥には、ホタルが生息する場所が多数あります。二子山、大楠山、武山などの脊梁となる低山が残され、その尾根が形成する谷戸奥などにホタル生息地が残されています。かつては、それぞれの谷戸の下流までホタルが舞っていたものと思います。現在、三浦半島にある谷戸の多くは、耕作放棄された水田、手入れのされない堰や荒れた林となり、生物も減少し、荒れて育ちすぎた森は防災面でも課題となっています。経済的メリットも少なく、後継者も不足している田んぼや雑木林は、いまや厄介者になっていて、所有者がはつきりしないものまで出てきています。一方で、太陽光発電や風力発電の整備による丘陵地の樹林の伐採が増えてきています。再生可能エネルギーの進展は、一面では望ましいことですが、それによって貴重な樹林が減少していくことが、本当の意味でいいことなのか考えさせられるところです。今、里山は、かつての経済的な役割が失われ、再生可能エネルギー施設の整備くらいが費用対効果が見込めるものになってしまいました。こうした現実が、里山を荒廃させ、さらには消失する道を歩ませていると考えられます。

こうした状況を変えていくには、里山の新たな価値の創出が必要です。里山の持続可能性を高める「人の活動」が求められています。横須賀市では、ひとつの試みとして、モデル地区を設け「里山的環境の再生」を推進しています。生物多様性の効用には自然環境を享受する「文化的サービス」があり、近年のツーリズムの中には自然環境の中

での活動体験やネイチャーツアーがあり、女性や中高年者の登山などによる愛好者が増えてきていると聞いています。南の島では、ダイビングやスノーケリング、ホエールウォッチングなども人気で、身近な自然環境が少なくなる中で、イベントとして自然環境に親しみたいという人が増えてきている傾向を感じます。横須賀市の事業では、NPO や地元の力を借りて、里山の手入れを進めつつ、田んぼづくり講習会や里山林手入れ講習会、子どもの自然体験、収穫祭などを行っています。講習会では、自然に関わる楽しさを味わっていただくとともに、里山再生の担い手を育成するという狙いがあります。自らの手で米を作り、それを食べることで、産業としての農業ではなく、自然と親しむことを目的とする新しい価値の創出を進められないかという試みです。また、薪の炎は心を癒してくれます。薪ストーブの煙に対する近隣からの苦情といった課題などありますが、薪ストーブも普及してきていると聞きます。薪ストーブの炎がもつ癒し効果は新しい価値づけにつながるのではないのでしょうか。このほか、里山を活用したエコツーリズムなども、新しい価値といえると思います。こうした、里山そのものが、私たちの暮らしの中に潤いを提供する存在として、新しい価値となっていくことが必要です。

もう一つ、視点は違いますが、期待できるものにバイオマス発電があります。里山の間伐や樹林の更新によって生じる木材を発電燃料に使い、電気という価値に転換できれば、持続可能な里山の管理と再生可能エネルギーの進展に繋がっていくのではないのでしょうか。伐採と輸送のコストが、発電コストに見合うかという課題があると思いますが、気候変動対策と生物多様性保全という両方に貢献できる可能性がありますので、経済的メリットとともに地球環境対策的なメリットに注目し、その面からの公的な支援なども視野に入れるべきものと思います。

これまで述べてきましたように、里山の新たな価値創出のためにできる「人の活動」には、二つの方向性があると考えます。一つは、“里山を楽しむ、味わう、さらには未来のためにその環境を守りたい”という「里山サポーター」を増やすという考え方です。もう一つは“経済的メリットのある発電というバイオマス発電を通じて、経済性だけでなく、CO₂削減にも貢献するという国際社会の一員としての使命を担う”という観点での活動になります。

これらの活動によってよみがえった魅力ある里山が、いつの日か人々をさらに引き付ける存在となる、そういった好循環が生まれたら素晴らしいと思います。

ここに述べた方法だけではなく、かつてとは違う里山の価値を見出し、人と自然環境の持続可能な新しい関係を生み出すことで、里山の自然環境が保全・再生され、多くの生物が暮らす環境を取り戻すことはできます。それが、私たちが求める美しいホテルの舞い飛ぶ風景を呼び戻すことになると思います。

ホテルは身近な自然環境、里山の象徴です。多くの先人が暮らしの中で築きあげてきた環境を、私たちが持つ価値観の中で再生の道を考えていくことが重要であり、必ずできると思います。

年の初めに当たり、夢を語らせていただきました。ありがとうございます。

「大沢川（八王子市）源流域のホタルを守れ」

開発中止を求める住民運動を展開

川町 環境を守る会代表 川又秀夫

八王子市西部に位置する川町の中央を西から東に流れる川は、大沢川である。川町西部から発するこの大沢川源流域は急峻な谷戸を形成していて、源流域下部は放棄された休耕田跡地である。ここにゲンジボタルとヘイケボタルが生息しているが、最近ゲンジボタルとヘイケボタルが同時期に乱舞している様子が都内では初めて写真撮影された。



この源流域は JR 高尾駅から北に約4kmのところであり、北側には小田野城跡、南側には都営八王子霊園が隣接する。湿地となっている休耕田跡地の標高は約 190m、谷戸を囲む稜線の最高標高は約 280mである。湿地は最長部分で目測 70m×40m で、広さは 0.2ha 程度である。湿地の東南側山際を小沢が東南方向に流れ、西北側山際には水のしみ出しがある。湿地を挟む山地は落葉広葉樹林で構成される二次林（主にコナラ）で、湿地の上流部方面の山地は主に植林地（主にスギ・ヒノキ）である。

1980 年代後半、源流域の東側、すなわち大沢川の北側丘陵（恩方丘陵）に大型住宅団地が完成した。その後、団地住民有志によるこの源流域のホタル観察会が続けられてきた。2012 年突然、ここに大量残土を積み上げスポーツ施設を造るとする計画が

発表されたのをきっかけに「川町の環境を守る会」ができ、それ以降は会が主導してホタル観察会が続けられてきた。

2019 年 9 月 7 日、朝日新聞多摩版のトップに「八王子の湿地「源平」乱舞」という見出しの記事が大きく掲載された。源平乱舞の美しい写真と、ゲンジとヘイケの「2 種類が自生し、同時に舞うのを見られる場所は都内では珍しい」という記事である。この記事を読んだ地元住民の多くは、ホタルの生息する貴重な自然環境が近くに存在することを改めて感動をもって受け止めた。

この記事の端緒となったのは、東京ゲンジボタル研究所代表で日本ホタルの会理事の古河義仁氏である。ホタル観察会を続けてきた守る会は昨年、古河氏に現地視察をお願いした。結果、7 月 5 日、古河氏自身によってゲンジボタルとヘイケボタルの乱舞する写真撮影が成功するのだった。

新聞記事には、ゲンジボタルとヘイケボタルの「両方が生息する場所でも、ゲンジボタルが光る時期を過ぎてからヘイケボタルが光ることが多いが、今回は谷の奥まった場所で気温が低いため、ゲンジボタルの光る時期が遅かったとみている」という古河氏のコメントが掲載された。

こうしてホタルの生息する当地の谷戸が都内でも特に貴重な自然環境の残る場所だと判明したのだが、現在、ホタルはもとより当地の自然環境が失われるかもしれないという危機的な状況にある。前述したように、谷埋め残土持ち込み計画が着々と進行しているためである。

以下、この計画の概要を簡単にお伝えする。

計画事業名は(仮称)八王子スポーツパーク建設事業

- ・サッカー場 2 面、野球場1面、テニスコート 3 面及びアーチェリー場を造る
- ・開発面積は 15ha
- ・55 万立米の建設残土を最大 38m の高さに埋め立てた上に施設を造成する
- ・事業者は地元私企業2社と NPO 法人スポーツビジョン 21
- ・事業資金は 7 億 7 千万円



計画発表後に立ち上がった守る会は、隣接する地元自治会と協働して今日までその中止を求め運動を続けてきた。

私たちが事業の中止を求める理由としては、①谷戸の自然環境が破壊される、②埋立残土が放置される、③埋立残土が崩壊する等をこの間訴えてきた。

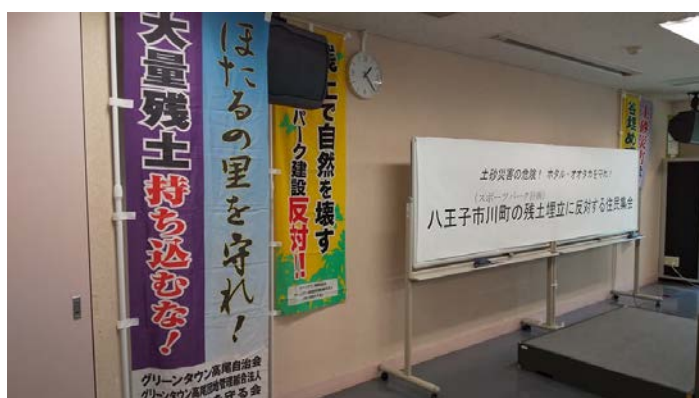
①の谷戸の自然環境が破壊されるおそれについては、2014 年発行の「新八王子市史 自然編」で、事業予定地が“深山を思わせる自然環境の残された場所”“東京都としても特筆すべき希少なシダ類が生育する”“基本的な自然を知るうえできわめて重要な場所”としてわざわざ特筆している。何とここに大量残土を持ち込もうとする計画である。②の理由について私たちは、事業者に建設資金の準備はなく、スポーツ施設に名をかり

て残土受け入れ代金を手にするのが目的だと計画中止を求めてきた。そして、法的には残土埋立後、利用目的の変更は可だというのだ。③に関しては、土木の専門家による分析(徳竹, 2017)によっても裏付けられてきた。

谷戸に生息するホタルの評価について再認識させていただいた古河理事から昨年、守る会宛に意見書をいただいた。その結論として、「計画予定地内に生息するゲンジボタル及びヘイケボタルは、計画実行の暁には絶滅することが明らか」と断定されており、計画実行に警鐘を鳴らされている。

にもかかわらず、最終的な事業の開発許可権を持つ中核市たる八王子市はこれまで、地元住民の声を無視して行政手続を進めてきた。2019年11月現在、東京都の自然環境保全審議会で本件が審査されているが、私たちと問題意識を共有する指摘が委員から多数なされ、いまだ継続審査となっている。都の審査が終了すると、残るは八王子市の許可申請に対する審査となる。今後も私たちは、東京都及び八王子市に対して粘り強く働きかけ世論にも訴えていくが、ホタルを愛する多くの方々にも私どもの運動につきぜひご理解をいただきたい。

この無謀で危険な計画が中止されたときには計画予定地を「ホタルの里」とでもして、人々の憩いと学びの場になればと私たちは願っている。広くホタルを愛する方々とそのような協働のできる日が来ることを切に祈っている。



@@@ 寄稿に寄せて @@@

日本ホタルの会理事 古河 義仁

ゲンジボタルとヘイケボタルが同時に飛ぶ貴重な谷戸を建設残土で埋め立てをして、スポーツ施設を作ろうとしています。毎年2千万円以上の赤字になるという馬鹿げた計画です。大雨に耐えられるだけの設計ではなく、大規模土砂災害の危険性も示唆されています(徳竹, 2017)。ホタルだけではなく、多くの生き物が棲む豊かな自然環境を守るために、この事実を多くの方々に知っていただきたいと思います。

【参考文献】

徳竹真人『八王子市川町における残土埋立事業の問題点(講演資料)』, グリーンタウン高尾団地管理組合集会所, 2017年6月。

第 26 回 日本ホタルの会シンポジウム報告

2019 年 11 月 9 日(土)工学院大学新宿校舎において、第 26 回日本ホタルの会シンポジウム「ホタルを通じて身近な自然環境を考える」を開催しました。今回のテーマは、「生物多様性を考慮した自然環境の保全・再生活動」です。ホタルに関連する生物多様性の問題としては、ホタルを優先的に保全しようとする弊害やカワニナへのえさやりなど、生態系の多様性(環境)に関するものが少なくありません。一方、販売されているホタルを観光や興行目的で放出するケースや、ホタルの再生を進めたいが適切なホタルを容易に入手できない、ビオトープへの導入ホタルはどのように考えればよいのかなど、遺伝子の多様性への関心も高いと考えられます。しかし、他地域からの持ち込みは、感覚的には好ましくないと分かるのですが、その影響がどのように進み、何がもたらされるのかについて明確に答えることは難しいと考えられます。日本ホタルの会では、ホタルを身近に楽しみたい、子どもたちに見せてあげたい、遺伝子の多少の違いにこだわる意味が分からないなど、そういった声に答えられるようにしていかなければならないと考えています。

シンポジウムでは、はじめに日本ホタルの会の鈴木浩文副会長から「東京近郊のゲンジボタルの遺伝的攪乱現況」と題して、シンポジウムの趣旨説明がありました。東京近郊では、主に関東に分布している遺伝子型のほかに、中部地方に多くみられる遺伝子型や西日本に多くみられる遺伝子型が混在していました。そのような状況からホタル移植の三原則

- (1. 生物地理学上、本来生息していない地域へは移植しない。
2. 数を増やすために他地域から移植するのではなく、本来生息しているホタルを保護していく。
3. 自生のホタルが絶滅し移植を試みる場合は、最も近い水系のホタルを導入する。)を提唱していますが、ホタルとの関わり方は様々です。個人の趣味として家の庭に放して楽しみたい、子供に見せてあげたい、教育・展示のために室内外で飼育・観察したい、地域の川の清掃活動を通してホタルを復活させたい、自然環境の復元としての里山・ビオトープづくりをやりたい等々あります。それぞれの現場・場面で活動の規模も



違いますし、ホタル移植の捉え方も違ってきます。場合によっては、同じ遺伝子型の地域内であれば、持ち込みは可とする考えもあります。現状では、ホタルを容易に購入できますので、それによって攪乱されてしまうよりは、むしろ素性のはっきりしたホタルを養殖して、適所に供給できるような体制も必要になってきます。また、人工的に管理された閉鎖空間での展示目的であれば、購入したものでも可とする考えもあります。一方では、里山環境の保護から保全、再生へという考え方の変遷のなかで、生き物の導入をどのように捉えるのかということもあり、統一的な答えはありません。現在の時代背景において、それぞれの現場・場面に合わせて適切な活動を行うための議論が必要であるとの説明がありました。

次に、見沼たんぼ保全市民連絡会の村上昭夫代表より「見沼におけるホタルの歴史から再生への願い」と題して基調講演をいただきました。見沼たんぼは、さいたま市と川口市にまたがる芝川低地の田んぼで、長年にわたり数多くの市民団体がその保全と普及活動に関わってきており、その保全活動が日本ユネスコ協会連盟が主催する「プロジェクト未来遺産 2014」に登録されています。ご講演では、見沼のホタルに関する話（民話や氷川神社のホタル）、ホタルを生んだ農村生態系、稲作に関する農村行政の問題と限界、稲作に代わる樹木・野菜・観光への転換、見沼たんぼの保全・活用に関する市民運動とマスコミ報道などについて、ご自身の体験を通しての見解を述べられました。そして、最後に、ホタルの生息環境としての里地の復活や、そのための活動を包含した形のホタル社会学や学術的研究活動があることを、日本ホタルの会への期待としていただきました。

INFORMATION

事務局から のお知らせ

2019年11月8日千葉県長柄町において、リソル生命の森担当者と打ち合わせを行ない、里山保全による持続可能な観光に向けて「①2018年-2019年の調査結果等の報告、②2020年度調査方針、③費用負担の考え方」について整理いたしました。日本ホタルの会は2020年度もリソル生命の森に協力してまいります。皆様、今年も日本ホタルの会をよろしくお願いいたします。

ホタルのニュースレター（第84号）

2020年1月10日発行

編集 日本ホタルの会事務局

発行 本多 和彦

〒239-0824 神奈川県横須賀市西浦賀4-11-2-404 本多方

（日本ホタルの会事務局）

e-mail : 0723398601@jcom.home.ne.jp

URL : <https://www.nihon-hotaru.com>

Facebook: <https://m.facebook.com/nihonhotaru/>

印刷 青森コロニー印刷 東京都中野区江原町2-6-2

